

『上々吉だす。近々に一遍よせて貰ふて云ふてはりました。』

『そりや結構や。手ぬかりの無い様にせな可かんナ。』

『今度失敗つたらモウ取り返しが付きまへんで。それに豪い下駄を預けられました。貸して欲しいと云ふ物は何でも貸して呉れと云ふてはりました。あの旦那が先から断えときやはる位やさかい、今度は五十兩や百兩のチョロこい事やおまへんで。』

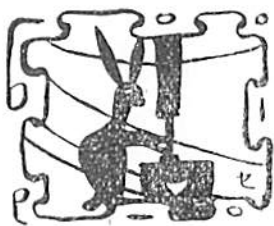
『諾しや。其手配しとこ。』

さア夫れから大阪中の兩替屋に掛け合ふて小判の融通を頼みましたが、何と云ふても北陽の綿富。信用が御座ります。千兩箱をドン／＼運んで来るのを庭先へ積み上げまして、伊八がそれへどんと腰を掛けて待つて居ると、日の二三日も過ぎた時分。薩摩上布の身軽な風態で、相變らず小さな包みを首筋へ括りつけて、チャラ／＼。

『おゝ伊八どん。先日は結構な物を有難ふ。今日は其お禮旁々、チョツと貸してお貰ひ申し度い物が有つて遣つて來ました。』

『旦那様お待ち申して居りました。多寡の知れたお茶屋風情で、大した御用は承り兼ねますが、千や萬の用意は致しとります。偕て御用立て申します金額は。……』

『ア、いや。チョツと貰の火が借りたいのぢや』(完)



素人藝の『一口噺』のコツ(二)

笑 福 亭 松 翁

老人が下らぬ事を申し上げて見ました處、幸ひ御意に適ひました様で、續いてもう一つと云ふ御注文で御座ります。お言葉に従ひまして今一つ申し上る事にいたします。今度のは前のに競べますと餘程難かしふ御座ります

が、其變り具合よく演りますと、聽てる方も演てる方も夫れ丈け面白味が深ふムります。

先づ例に依りまして筋を申し上げます、前口上は成る可く短かくして置きませふ。

◎へい。え、吃の道具屋が店を出して居ります處へ、吃のお客さんが來たと云ふお笑ひを申し上げます。

「ウツ、ウツ、おつさん。そツ、そツ、その、たツ、たツ、貰入イヒー。つオツ、つオツ、ちよつと、ウー見せてんか。」

「こツ、こツ、この、タタタタタ貰入れだすか。」

「ウ、ウ、ウ、ウ、眞似すない。」

偕て筋は此通り極く短いのですが、演り方は大分面倒すから、どふぞ根氣よふ御研究を願ひます。

前口上は少し馬鹿々々しいと思ふ位悠くり喋らぬといけません。成る丈け大きな聲で「へい。」